



「はい、こちらお天気相談所」

伊東譲司 著

東京堂出版, 2012年3月,
168頁, 1600円 (本体価格)
ISBN 978-4-490-20773-6

『青空はなぜ青いのですか?』

気象に関連する仕事をしている方ならば、一度はこんな質問を受けたことはないだろうか。大学の授業ではあれば「レイリー散乱によるものだから、放射の勉強をなさい」といえばいいかもしれない。しかし、これが一般の人からの質問だったらどうだろう。そのような答え方で納得するはずがない。一般の人からの気象に関する素朴な質問の対応を一手に担っているのが、気象庁の「天気相談所」である。

天気相談所には1日に平均で150件から200件の電話相談があるという（「はじめに」参照）。特に、台風や異常気象が起こった時などは、300件から450件もの相談があるらしい。本書の著者は、天気相談所予報官として勤務した経験をもとに、毎日寄せられる質問を選別し、質問の内容とその対応、付随する知識をまとめて本書を執筆している。素朴な質問から、本当にこんな電話がかかってきたのかと思われる質問まで、幅広く紹介されている。

さて、本書では質問が7つのトピックに分けられて記述されており、これがそのまま章立てとなっている。1章から順に、「雨のでんわ」、「風のでんわ」、「雲のでんわ」、「光のでんわ」、「波のでんわ」、「災害のでんわ」、そして「知識のでんわ」である。これらのタイトルからも、著者が一般になじみやすい言葉を用いて本書を執筆している様子が読み取れるだろう。ここでは各章からいくつかの質問を紹介しよう。質問に対する著者の回答は示さないでおくので、読者がそれぞれ読者なり回答を思い浮かべながら読んでいただきたい。

まず「風のでんわ」から一つ。『風はどうして吹くんですか?』。気象学の最も基礎的な知識の一つである。同時に、日常生活を送っている中で自然に感じる疑問である。私も小さい頃にこの疑問を持っていた。次に「雲のでんわ」から。質問は、『霧ともやのちがいは何ですか?』。これは気象予報士ならおそらく答

えることができる質問である。霧ともやは、どちらも微小な水滴、または氷晶でできているが、これらの違いを説明できるだろうか。3章は「光のでんわ」。文頭で示した『青空はなぜ青いのですか?』はこの章で紹介されている。また、『夕焼けってどんなきに見えるのですか?』や『虹はどうしてできるのですか?』など、この章には子供の頃によく疑問に思った現象に対する質問が紹介されている。続いて「波のでんわ」。最初の質問は『波はどうしてできるの?』である。ここで紹介されている「波」は大気の波動ではなく、海の表面に立つ一般的な「波」である。一般の人が天気相談所に大気の波動に関する質問をすることは考えにくい。ただ、最近では異常気象の説明を通じて、偏西風の蛇行やロスビー波という言葉が一般の人の耳に入り始めており、専門的な「波」の質問が天気相談所に届いているかもしれない。さて本題に戻って、次のトピックは「災害のでんわ」。ここでは台風や地震、集中豪雨など、災害をもたらす事象に関する質問と回答が書かれている。その中から一つ、『なぜ台風は、「上陸する」と表現するのですか?』。これは私も知らなかったが、皆様はご存じだろうか。いわゆる雑学である。最後に「知識のでんわ」。気象学の基礎知識から天気予報、地球温暖化まで、様々な知識に関する質問が紹介されている。『天気予報はどうやって作っているのか教えてください』。これは気象の研究者や気象予報士は、必ずと言っていいほど聞かれる質問ではないだろうか。以上が全7章の簡単な紹介である。なお、本書が昨年の東日本大震災の後に執筆されたこともあり、随所でこの震災のことが触れられている。

本書の中での隠れたお勧めが、時々登場する「電話奮闘記」である。ここでは実際に行われた電話でのやり取りが会話形式で書かれている。これを読むと、いかに多様な電話が天気相談所にかかってくるのかがよくわかる。質問によっては、質問に正確に答えるだけでなく、電話をしてきた人の感情を読み取り、まるでカウンセラーのように接することが大事な場合もある。たとえ相手が感情的に電話をかけてきたとしても、天気相談所の職員が電話口で喧嘩をしてはいけないのである。

本書では、最後に「寒いほどきれいな冬の自然」として、霜柱や霧氷、氷柱などの写真が掲載されている。ただ、「知識のでんわ」のあとに特に説明もなく出てくるため、やや唐突な感じを受けた。個人的に

は、最後に全体のまとめのような章があってもよかったのではないかと思う。また、本書には多くの図が掲載されているが、本来カラーと思われる図がすべて白黒だったことが残念である。

本書を読んで、著者の回答が適切だと思われる質問もあれば、私なら別の言い方で回答する、という質問もあった。質問に対する答えは一つではなく、いろいろな答えがあるはずである。本書をただ読み流すだけで

なく、質問に対する読者なりの回答を考えながら読むことで、本書を読む価値がさらに高まるのではないだろうか。1日に150件近くあるという電話。是非第2弾、第3弾を期待したい。

最後に、改めて本書評の読者へ。
『青空はなぜ青いのですか？』
いい回答を思いついていただろうか。

(海洋研究開発機構 川瀬宏明)